

「もっと響く指導」に
するために!

生きたデータの徹底研究

「データ」を活用して客観的に生徒の状況を捉え、指導の方針を整理する方策を伝えてきた「生きたデータの徹底活用」。さらに響く指導を実現するために、現場の先生方と改めて指導のポイントを確認し、「データ」の改良を検討します。

テーマ 次年度につながる3年生指導の仕上げ方



「生きたデータ」2013年2月号を参考に、
再現答案作成に取り組んだところ……

図1 3年生が作成する再現答案

大学・学部・学科名 / A大学 理学部数学科 (前期)		教科名 / 数学
大問1	$a^2 - a = a(a-1)$ a は奇数より $a-1$ は偶数となる また、 a と $a-1$ は互いに素であり、	予想得点率 100% 50 0
大問2	$\triangle ABC$ において余弦定理を用いると $AC = 5^2 + 4^2 - 2 \cdot 5 \cdot 4 \cos 120^\circ$ ここで $\cos 120^\circ = -\frac{1}{2}$ より、	予想得点率 100% 50 0
個別学力試験 教科別得点率		センター試験得点率(合計)
数学 (70%) 理科 (45%) 英語 (60%)		(70%)
■入試を終えての感想 ほぼ例年通りの出題。予想外に60%にあっただけ。		

私の狙い

3年生が作成した再現答案で教師、生徒がリアルな合格者像を共有したかった

取り組み内容

3年生の協力を得て、合否にかかわらず、多くの生徒の再現答案をそろえた

感じた課題

生徒に手間を掛けさせた割には、教師が分析に十分に生かせなかった。また生徒にとっての活用方法も不明瞭だった

「もっと響く指導」
のポイント

①

再現答案で指導の総括を行い、
次年度の生徒、教師に引き継ぐ



今年度、初めて3年生を担当しているのですが、本校では毎年3年生に再現答案を作成してもらっています。実は前任校でも再現答案作成に取り組んだことがありましたが、周囲からの「受験のリアリティーを感じさせるだけの資料に、手間を掛けすぎではないか」という声が大きく、取り組みは長続きしませんでした。M先生の学校では、再現答案のメリットをどのように位置付けて取り組んでいるのでしょうか。



まず、教師のメリットとしては、再現答案の採点を通して、それまでの指導を振り返りながら教科指導力を高めるチャンスを得られることです。次に、次年度以降に受験する生徒のメリットとしては、身近な存在である先輩が入試本番で作成した合格答案をリアルに見ることで、どうすれば自分に合格答案を作成する力を付けられるのか、1年後の入試から逆算して計画を立てるきっかけになることです。



再現答案は、「合格者はどれくらい書けたか」を確認するだけではなく、むしろ偏差値だけに頼らない学力把握の機会と言えそうですね。



そう思います。「合格答案作成のための学力の土台が、2年生の学習内容にあった」などと気が付き、気持ちを引き締めるのは生徒だけではありません。本校でも、平素の指導的確さが、入試本番の厳しい採点に耐え得る力を付けるということを認識する若手の先生は増えてきました。

※このコーナーは、高校の先生方（今回は中国・四国地方）との検討会の内容を基に構成しています。

中堅先生代表

四国地方の公立高校
勤務。13年度は3学
年担任。進路部所属。



S先生(40代)

中国地方の公立高校
勤務。13年度は3学
年の学年主任。



M先生(40代)



再現答案は確かに見るだけでも迫力があるのですが、それを生徒、教師がどう役立てるかが明確になっていませんでした。「これだけ書けたのか!」「すごい!」という感想を持つレベルからもう一歩進み、生徒の学習計画の見直しや、教師自身の指導の改善などにつなげたいと思いました。



「もっと響く指導」のポイントと「生きたデータ」改訂案

再現答案と合否の分岐点記入シート



大学・学部・学科名 / A大学 理学部数学科 (前期)		教科名 / 数学	
大問1	$a^2 - a = a(a-1)$ a は奇数より $a-1$ は偶数となる また、 a と $a-1$ は互いに素であり、	予想得点率 100% 50 0	
個別学力試験 教科別得点率	数学 (70%)	理科 (45%)	英語 (60%)
センター試験得点率 (合計)		(70%)	
■入試を終えての感想 ほぼ例年通りの出題。予想は60%にあてふしたう。			
◎生徒自身が振り返る入試対策・合否の分岐点、 先生のアドバイス通り、2年生の春休みにそま この模試で間違えた箇所を全部洗い出し たのがよかったと思う。3年生の1学期、自分の 弱点分野と学校の問題集の基本例題で確認		◎合否の分岐点、を○などで示してください 	

「もっと響く指導」のために
改訂すると...

データを
生かす
指導の流れ

3年生が作成した再現答案から「合否を分ける解答力」を教師が読み取ったり、それを身に付けたりするプロセスを2年生が具体的にイメージできる工程を盛り込む。

- 1 合否を問わず、3年生に再現答案の作成を依頼する。この時、「合否の分岐点」も振り返ってもらう。
- 2 集まった再現答案を用いて教科団が模擬採点を行い、教科指導力の向上の場とする。
- 3 再現答案と「合否の分岐点」を2年生に開示する。



生徒には再現答案作成の際、その教科の入試対策を振り返り、高校生活のどこが合否の分岐点だったかまで自己分析してもらうのですね。これなら2年生も受験勉強をイメージしやすくなりますね。



先輩本人が分岐点を振り返ることで、日々の学習の延長線上に大学受験があることを生徒に伝えることが出来ます。再現答案作成は、入試まった中の3年生にとって負担になるのは事実です。しかし、教師が実際に採点し、3年生に補強ポイントを明示できれば、後期日程などの対策に生かすことが可能です。



再現答案は後輩たちのためだけに作成するものではなく、その作業を通して後期日程入試などの答案作成力アップを図れるものに出来れば、取り組みの価値は大きく高まりますね。



入試本番でのミスをやみや、次の入試に向けて気持ちを切り替えられない生徒は少なくありません。そうした生徒にとって、再現答案の採点が「出来なかったことを冷静に振り返り、次に生かす」機会になると判断できれば、3年生の学年団として更に積極的に取り組みたいと思えるものになるはずですよ。

模試の判定別に合格状況を見ることで、「同じD・E判定でも、細部まで見ていくとその質の違いが分かってくる」など、判定の読み取り方を共有できました。ただ、そうしたテクニカルな話題から、「合格力を持った生徒を、3年間を掛けてどう育てるか」という大きな視点の議論に発展できればより有意義だったと思います。



「生きたデータ」2013年2月号を参考に、合格ストーリーづくりに取り組んだところ……

図3 3年間の合格ストーリー 設計シート

●第1志望合格者を増やす手立て（12年度結果より 判定値は○模試）				
A判定	B判定	C判定	D判定	E判定
24人合格/28人中	42人合格/56人中	41人合格/80人中	31人合格/104人中	22人合格/132人中
この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導		この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導	この層の合格者を増やすために本校が注力すべき指導	

私の狙い

「難関国立大」「国公立ブロック大」など、大学層別に第1志望に合格した生徒像を言語化し、共有したかった

取り組み内容

合格した生徒のデータを基に、各大学層で模試の判定別に第1志望合格者を増やす手立てを、3年生の学年団で話し合った

感じた課題

合格者の成績の特徴や模試の成績表の読み取り方は共有できたが、具体的な生徒像や3年間を通した育成の手立てまで議論が深まらなかった

「もっと響く指導」のポイント

2

合格者の特性を精緻に言語化して
ぶれない3年間の合格ストーリーを共有する

これから4月に掛けて、校内で自校の指導の強みや弱点を整理し、3年間の生徒の合格へ向けた成長ストーリーを改訂していくことになります。次年度、各学年でどんな指導を行うかを検討する際の資料として、進路部から発信したいと思っておりますが、合格ストーリーづくりのコツのようなものはあるのですか？

合格ストーリーづくりの目的は、生徒が「高校生活を充実させることが、実は合格の近道」であることを再認識し、更に教師間での指導のぶれを防ぐことにあると思います。例えば、私たちは「清掃が行き届いているクラスは、入試実績も良い傾向にある」ことを経験的に理解しています。クラス環境を大切にしている気持ちと行動力は、教室での集中力と無縁ではありません。しかし、そうした生徒の人的成長が成績の伸びに結び付いていることを、全ての教師が確信しているわけではありません。そのため、合格ストーリーを言語化し、その本質を校内で伝承することが困難な高校もあります。

正直に言えば、私も「育成したい生徒像」をきちんと言語化し、他の先生に説明する自信はありません。なんとなく分かってはいるつもりなのですが……。

そうだとすれば、合格ストーリーづくりは、当たり前のことを徹底した時に、生徒にどんな成長があるのかを言語化して共有する作業であり、私たちの指導のよりどころになるものと言えそうですね。



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ダウンロードできます！

生徒指導・進路指導ツール集

ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp>

生きたデータ

検索

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも同じウェブサイトでご覧いただけます。併せてご利用ください！

HOME→教育情報→高校向け→

生徒指導・進路指導ツール集をご覧ください

2009年度2月号 「次年度につなげる総括・引き継ぎと3年生からのデータ収集」

2006年度10月号 「3年生2学期の意識付け」

2006年度4月号 「入試結果データの見せ方」



「もっと響く指導」のポイントと
「生きたデータ」改訂案

合格した生徒特性から指導を考える検討シート



●第1志望合格者を増やす手立て（13年度結果より 判定値は○模試）		受験大学層【 難関国立大 】		
A判定	B判定	C判定	D判定	E判定
2人合格/ 3人中	3人合格/ 5人中	5人合格/ 10人中	2人合格/ 5人中	0人合格/ 4人中
◎合格した生徒特性（学習習慣、生活習慣など） 個別学力試験で戦える教科が2つはある。自宅学習は「量」より「質」。将来のイメージを持ち、興味関心の幅が広い。精神的に安定している。	◎合格した生徒特性（学習習慣、生活習慣など） 個別学力試験で戦える教科が1つはある。模試の見直しを必ず行っている。学習上の悩みが少ない。指導に素直に耳を傾ける。	◎合格した生徒特性（学習習慣、生活習慣など） 3年夏以降の伸びが顕著。基本的な生活習慣が身に付いており、学習効率が良い。授業中の集中力が抜群。がむしゃらに勉強に向かえる。		
◎この層の合格者を増やすために注力すべき指導 選りすぐりの問題を解かせる。教えずさない。着想と思考プロセスを重視。「生きた教養」を育む環境をつくる。	◎この層の合格者を増やすために注力すべき指導 過去問の徹底研究。答案を作成するという意識の向上と実戦力の育成。個別学力試験での超苦手科目の私試。質を重視した学習内容の確認。	◎この層の合格者を増やすために注力すべき指導 興味関心を広げながらバランスのとれたセンター試験対応学力を養成する。個別学力試験で戦える科目を1つはつくる。第1志望を貫かせる個別指導。		
◎3年間を通してこだわりたい指導のキーワード 教えずさない 自律 学習効率を上げるプロセスを重視する 夢を語り合える面談と、夢を実現させる教科指導				

「もっと響く指導」のために
改訂すると...

データを
生かす
指導の流れ

「どのような学習習慣・生活習慣の生徒が合格しているのか、それは日頃から教師が生徒に指導しているものと同じか」を検証し、更に徹底していく場とする。

1 3年生の学年団で、合格した生徒の特徴を学習習慣・生活習慣などシーン別に洗い出す。

2 「第1志望合格者を増やすポイント」を3年間を視野に入れて分析し、次年度の3年生の学年団に伝える。

3 更に1年生、2年生の学年団にも共有してもらうことで、「学校全体として大切にすること」を徹底する。



「難関国立大」「国公立ブロック大」「難関私立大」など、生徒の受験大学層ごとに、第1志望に合格した生徒は3年間をどのように過ごしたのか、学習面、生活面での特徴を出来るだけ具体的に挙げていくことで、合格ストーリーをつくるためのいろいろな観点が共有できそうですね。



生徒の特性を共有した上で、「そのために何をするのか」も具体的にしたいですね。特に、秋の時点でD判定やE判定でも最終的に合格した生徒からは、彼らがなぜ合格できたのか、1年生からの学習面や生活面での特徴を皆で言語化することが大切だと思います。その過程で、指導のノウハウが継承されるはずですよ。



教師の目に映った生徒の特性を列挙してだけでなく、生徒自身に自分の合格力を分析してもらっても良さそうですね。それを1・2年生が見たら、とても参考になりそうです。



同感です。それは、再現答案作成時に書いた「合否の分岐点」とも共通しますよね。高校生活の日常の中に合格力を見いだせれば、私たちの3年間の指導はきっと一貫したものになるはずですよ。